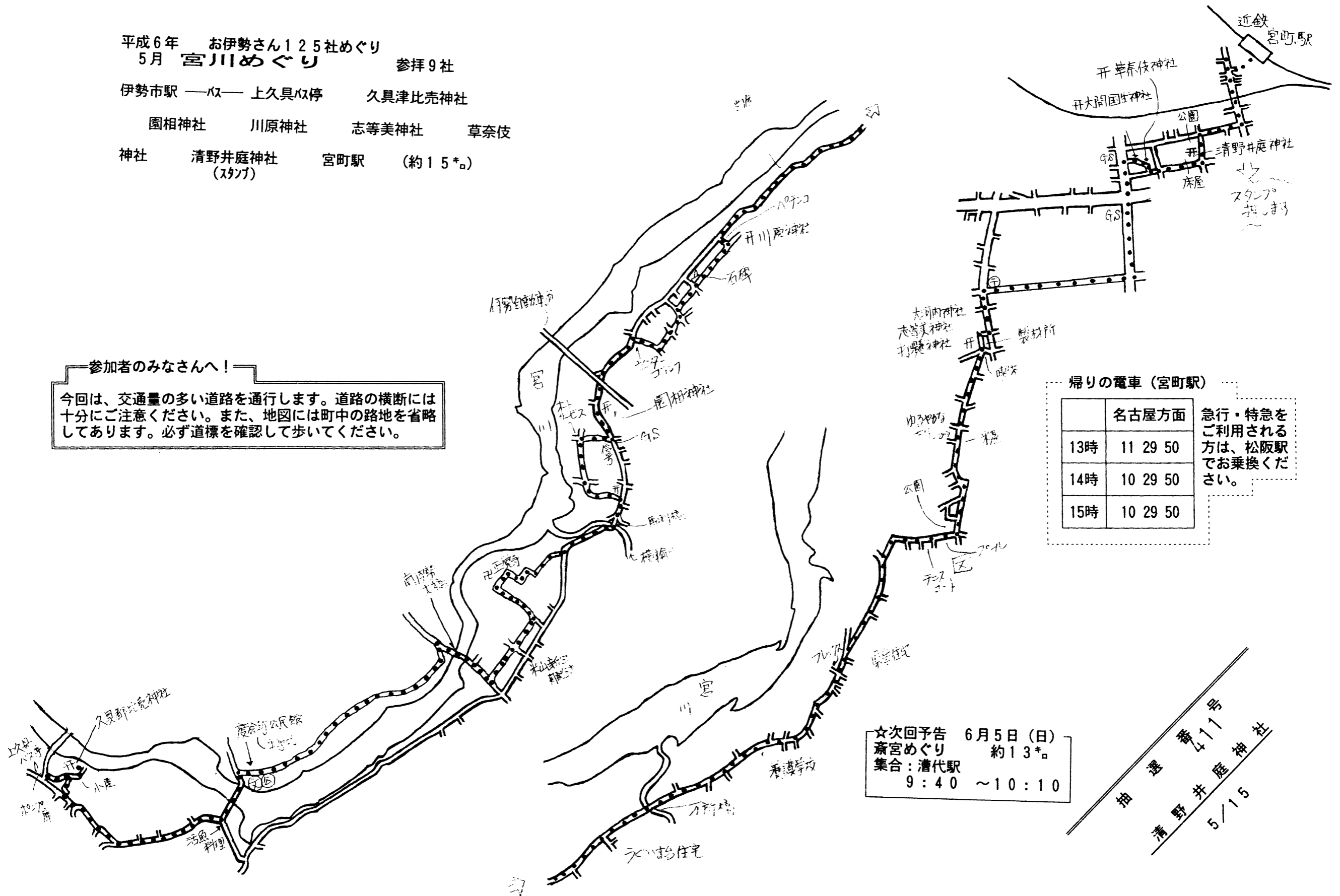


平成6年 お伊勢さん125社めぐり
5月 宮川めぐり 参拝9社

伊勢市駅 — 久具 — 上久具 — 久具津比売神社
園相神社 川原神社 志等美神社 草奈伎
神社 清野井庭神社 宮町駅 (約15分)

参加者のみなさんへ！
今回は、交通量の多い道路を通行します。道路の横断には十分にご注意ください。また、地図には町中の路地を省略してあります。必ず道標を確認して歩いてください。



帰りの電車 (宮町駅)

	名古屋方面	急行・特急をご利用される方は、松阪駅でお乗換ください。
13時	11 29 50	
14時	10 29 50	
15時	10 29 50	

☆次回予告 6月5日 (日)
斎宮めぐり 約13分
集合：漕代駅
9:40 ~ 10:10

抽選券 4/17 号
清野井庭神社 5/15

宮 川 め ぐ り

宮川は紀伊山地、日の出岳に発し、伊勢市北部で伊勢湾に注ぐ全長91kmの川である。万葉の昔から

度会の 大川の辺の 若久木
わが久ならば 妹恋ひむかも

と歌にも歌われてきた。大川は宮川、他に度会川、豊宮川とも称した。宮川というのは、伊勢神宮の近くを流れていた所から出た名称だが、宮川と呼ばれるようになったのは、平安時代に入ってからと思われる。文学の世界では、鎌倉時代の「新古今集」にはじめてその名があらわれる。

度会町

度会町は古くは神々がたどった伊勢神宮ゆかりの神の園である。

度会郡のほぼ中央に位置し、面積は134.97K m²で、東西10.5K m²、南北18.5K m²の広がりを持つ。紀伊山系の主峰大台ヶ原に源を発する清流宮川は、豊かな水量をたたえながら、四季おりおりに趣を変える岸辺の姿を映しながら流れている。

先人の足跡は古く、森添遺跡をはじめとする遺跡群が河岸段丘上に数多く分布している。古代においては、神宮とのかかわりから倭姫命巡行にまつわる地名・久具都比売神社などが伝承され、極めて古い歴史を有する町である。

南北町時代は南、北朝それぞれの拠点が築かれ、動乱の舞台となっている。その後、北畠氏、蒲生氏などとその管轄が変わり、徳川時代では紀州藩（田丸領）として明治維新を迎えている。

町は大きく4つの地区に分かれており、

中川地区には、倭姫命ゆかりの「注連指」、国指定重要文化財「十一面観音像」

内城田地区には、名刹「蓮華寺」、「国東山」

小川郷地区には、県天然記念物「火打ち石」

一之瀬地区には、「おおむ石」、「乙女岩」

などがある。

茶、鮎、そして「真水の文化ゾーン」度会町は、いつでも、どこでもなつかしい素顔をみせてくれる町である。

○一之瀬城址

一之瀬川に沿って伊勢南島線をさかのぼると、深い森に覆われた一之瀬城址がある。

南北朝の昔、南朝の忠臣北畠親房後醍醐天皇の皇子宗良親王を奉じて、この一之瀬城に進出、北朝の拠点であった法楽寺の軍勢と戦っている。

親王の歌集「李花集」に

延元二年夏の頃、伊勢の国一之瀬という山の奥に住み侍りしに郭公（ほととぎす）を聞きて

深山をば ひとりな出でそほととぎす
われも都の人は待つらむ

○乙女岩

高さ約36m、頂上の広さ約5㎡で次のような伝説がある。

倭姫命が天照大御神の鎮座地を求めて度会郡各地を巡られての帰路、大宮町から藤越を越えて川上の地にやってきた。旅に疲れた命はこの岩の上で休まれ、たどってきた道を振り返られた。すると、藤小屋の「柚小屋」が寂しげに見えた。命はこれまでの苦難を思い起こし、この岩のうえに大神を休ませられたという。このことを知った地元の人が命に玉串をささげるところ命はたいそう喜ばれ、「玉串」の姓を与えたということで、今も川上には玉串姓をなめる人が住んでいる。

この岩の近くには「足あと岩」もあり、車の轍のあとといわれる数条の溝や、命につきしたがった犬の足跡らしきものも見られる。

◎久具都比売神社（皇大神宮摂社） 祭神 久々都比女命 久々都比古命

社名は延喜式神名帳の記すところで、内宮の儀式帳には久具社とみえている。

久具の地の守り神として、久々都比女命、久々都比古命二柱をお祭りしている。大水上命の御子神であるといわれているから、久具の地を灌漑する水の神、五穀の神として信仰されたものと思われる。

倭姫命が皇大神を奉載して滝原宮より山越えに一之瀬の谷、和比野へお出ましになり、小川谷を経てこの地へ出られたとき、久々都比古命がお迎えし、この地は「久求小野」なる由、お答え申し上げたことが倭姫命世記にみえている。

中世、社殿頽廃したが、寛文三年再興し今日に及んでいる。本社入り口

に、享保甲辰の年、紀州藩により建てられた禁殺生石がある。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

なお、古くは正殿は三宇あったという。

神社の近く、宮川に新設された橋の名は「久具都比売大橋」である。

○郷土資料館

度会町棚橋69番地、宮川左岸内城田大橋橋詰にある。建物は、改築が進められる過程で最後まで残された町立中川小学校の一部を移築し、収蔵物、建物ともに的の文化遺産として保存することとした。

行燈、提灯、かつて盛んであった養蚕にかかわる諸道具のほか、久具都比売神社近くの森添遺跡から出土した縄文土器、土偶、装身用具などが陳列されている。

○大神宮法樂寺跡

棚橋の地に大神宮法樂寺跡がある。現在の蓮華寺である。

この寺は、一條天皇の頃、神宮大宮司大中臣氏が自己の氏寺として建立したものである。後、鎌倉時代に入り、文永、弘安の元寇の国難に際し、通海權僧正が龜山上皇の院宣を奉じ、外寇撃攘の祈願をあげられた所で、その祈願を法樂といい、この寺の名を大神宮法樂寺と改めた。

この寺は後、吉野朝時代には勤皇方の根拠地となった。

延元元年十二月から興国三年八月まで、北畠親房の援助を得て、大納言僧都隆経のたてこもったところである。

神宮の村松家行、吉津村の仙宮神社の神主、加藤定有等もここを助けて激しく戦った。

興国三年、仁木義長、高師秋のために陥落した。

伊勢市

○平家の里

サニーロードを南勢町へ向かう途中、横輪から旧道に入り更に進むと、矢持町菖蒲に至る。ここに久昌寺という寺がある。

今を去る 800年前の寿永四年(1185)、平清盛の四男、知盛は壇ノ浦の戦いで源義経に敗れ、自害して果てたとあるが、伝説では、知盛は生き延び従者30人とともに、伊勢船江に上陸、前山(伊勢市前山町)に隠れ住んだが、源氏の探索が厳しくなると前山から鷲嶺を越え、覆盆子谷へ逃げ延びたというものである。知盛の死後、菖蒲の地に御堂を建て、菩提を弔ったのが知盛山久昌寺である。

知盛の谷水田とし植田とす - 山口誓子 -

○岩波の里

サニーロードが宮川を渡る橋(南伊勢大橋)から下流をみると、宮川が円座の地にカーブして突き当たる大きな岩がある。この付近が「伊勢新名所絵歌合」の名所、岩波の里のあったところである。

月も猶 すみこそまされ みやがわや
きよきながれの いわなみのさと

○米山新田

県道伊勢南東線とサニーロードの交差点の手前の道路沿いに一つの碑が建っている。

これは、この地の豪族、米山氏が数代にわたり開墾したものである。元禄の昔、米山多右衛門宗隆が初め7町歩の地を開き、次いで多右衛門宗持が再度村民を督励して現在見るような美田を開いた。そして、これを灌漑する用水を得るため、横輪川からトンネル工事を施すという難工事をしとげたものである。

この事業のため、米山氏は幕府に資金援助を申し出たが入れられず、ために全財産を投じてこれを完成したが、借財の返済ができず、その責をおって、天保13年(1842)自刃した。

この碑は、明治十八年十二月、矢土銀山の文により建立されたものである。土地の人々は、この開墾地を「米山新田」とよび、今にその徳を伝えている。

◎園相神社（皇大神宮摂社） 祭神 園作神（曾奈比比古命）

県道伊勢南島線沿い、完成した高速道路の、そのすぐそばの社が園相神社である。

社名は延暦儀式帳に園相神社といい、延喜大神宮式には園神社、司神名式には園相神社となっている。園相は古くはソナフとも読まれている。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門板扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

入口には紀州藩が享保甲辰の年に建てた禁殺生石がある。元の鎮座地に儀式帳の記述とあわないことから現在の地ではないことは明らかである。

現地は、中世の殿舎頽廃後、寛文三年に再興し、元禄七年にこの地に定めたものである。

儀式帳の「四至、東川、南西大山、北公田」の記述にあう地を付近に求めると、伊勢市円座町の地内「曾奈布」と字名する地がこれにあたりと見えらる。この円座及びその南の神園町は、共に昔は神宮の御園であり、そこに鎮座することから園相神社としたものである。

倭姫命世記に、皇大神が久具社から宮川を下りこの地に着いたとき、この地の園作神が皇大神のために御耕地として御園の地を奉ったので、倭姫命は大いに喜ばれ、ここに園相社を定められたという。

○圓山（玉田山）

園相神社から少し下ると、右手に丸い小山が目につく。これが圓山である。形が玉のように丸いことからの名である。

この山の美しさは対岸の岩出の里からの方がよく味わえ、昔、神宮の勢主がこの岩出の里に居を構えたのも、この山の美しさに心を惹かれたものであろう。

倭姫命世記の中にも、倭姫命が川上からこの地を通られたとき、このその美しさを褒めて「目出野（メノ）」と申され、また、この圓山を褒めて「津不良」なりと仰せられたと伝えられている。今も津村の東方の畑を、土地の人達は「メンド野」と呼んでいる。「津不良」の名は、現在「津村」の名で町名として残っている。

丸いものを「ツブラ」と称したものであるが、それから転じて、丸い石の円墳をこの意味を借りて用いることがある。対岸の玉城町「積良」もこ

のツムラから出た言葉で、共に古代氏族の古墳地帯であったことを語っている。

○長泉寺とかんこ踊

県指定無形民俗文化財

長泉寺は曹洞宗の寺で、玉城町広泰寺の末寺にあたる。この寺の境内で旧盆15日に「かんこ踊」が行なわれる。

黒色段染の筒袖、白木綿を腹に巻き、手甲脚絆ゾウリばき、萱製の腰蓑頭に白馬の毛で作った「かつら」、胸にかっこを装った異形の踊子による羯鼓踊は現在、佐八、円座の両町で行なわれている。俗に「かんこ踊」といわれるものである。もともと踊りに使用される羯鼓そのものは、東洋伝統の古い楽器の一つで、インド、中国、朝鮮を経て奈良時代に日本に伝えられたものである。

「かんこ」は、「神迎」の義とする説もあり、奈良時代以後、仏事荘厳のための伎楽が後に庶民化され、変容したものと思われる。現在の踊りは神事舞、仏事舞の内容を持っているが、いずれも念仏踊りの色彩が強い。

これらの根源には神を敬い、自然を畏怖する素朴な住民の信仰感情が見られ、絶対者の前に住民の安穏と祖先を敬愛する行事を通して神仏への接触祈念が形式化されたものと見るべきであろう。 ※伊勢市の文化財

○神宮苗圃

佐八小学校の裏手、街道と宮川との間に挟まれたところに神宮苗圃がある。

神宮の桧の苗を栽培するところで、整然と区切られた苗床に、桧の苗が何万本と植え揃っている。神宮御山のための予備栽培地である。

○藤波里

神宮苗圃のすぐ後の畑地が藤波の里の旧地である。

すぐ西側は宮川の岸にのぞみ、川が入江になり湾曲し、岸に当たって砕ける様があたかも藤の花が飛び散るように見えるところから、藤波の名が起ったといわれる。

内宮の神主、荒木田氏の一門である藤波氏はここに居をかまえていたために、地名を家名としたものである。

鎌倉時代の「伊勢新名所歌合」にも、時の祭主、祢宜達がここの景色を詠んでいる。

宮川の あたりは春の 色なれど

松にはえたる 藤波の里
みどりなる 松にかかれる 藤波の
里のさかりに 見ゆる春かな

◎川原神社 (皇大神宮摂社) 祭神 月読神御玉

宮川を県道伊勢南島線にそって下っていくと、佐八町の川原神社に達する。

社名は延暦儀式帳には河原神社とあり、延喜大神宮式には河原社、神名式には河原神社とある。

佐八という地名は、元来澤地(あるいは澤道)の意味で、昔、このあたりは宮川の川原で澤地を成していたことを示すもので、その川原に鎮座することから川原神社の名が伝わっているものである。

倭姫命世記では、このあたりを通られたとき、澤道の野原があることをもって「澤地の小野」と名付けたという。

また、同書によると、大若子命が船でこの地に皇大神をお迎えしたのでここを御船向田国と名付け、ここから御船で宮川を下り、五十鈴川の川上に御遷幸されたことを伝えている。

古いこのあたりの地名を沼木郷というのもこのことに由来している。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎志等美神社 (豊受大神宮摂社) 祭神 木神久久能知神
(志等見名神)

上社の社地と隣あわせである。鳥居をくぐると三つの社があるがその一番奥である。

神祇本源に大治三年六月十日、宮川堤防の守護神として志止見名神に従五位下、打懸名神・大河内神に従四位下の神位を奉ずる、とある。

神宮の諸社中、神階のあるのはこの三社だけである。宮川の畔近くに鎮座しているので、特にこのことがあるものと思われる。その位、宮川の氾濫は神境伊勢の大患であった。

上社は、志等美神社の旧跡に付近の人々が産土神として立てたものである。山田原はシトミ野、キヨ野、ウズ野という原野を開墾した所、その灌漑用の堰場の守護神を祭ったものである。

殿舎		
正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門板扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎大河内神社（豊受大神宮摂社） 祭神 大山祇命

志等美神社の隣、三社の中の中央の社（異論あり。中央が志等美神社、東が大河内神社、西が打懸神社とする説もある。）

延喜大神宮式及び神名式に所載あり。神名祕書及び社記に、祭神大山祇命沼木郷山幡村に坐す、とある。

大治三年、宮川堤防守護のため、従四位下の神階を下さる。社域の移動は志等美神社と同じである。元来独立の神社であったが、再興されないまま志等美神社御垣内にある。

◎打懸神社（豊受大神宮末社） 祭神 打懸名神（立石大明神）

大治三年、宮川堤防守護神として従四位下の神階を下さる。

元禄五年、大宮司長春、志等美、大河内二社を岩戸山よりヤバコ坂に移したとき、初めて同地に本社を再興、明治16年現地に遷座。

本社を撫懸社とあるのは、延喜斎宮式及び皇大神宮儀式帳所載の忌詞に打を撫というからである。

打懸の懸は、懸稻（カケチカラ）のカケで、五穀稲穂の守護神として祭られてきたもののようと思われる。

殿舎		
正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門板扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎草奈伎神社（豊受大神宮摂社） 祭神 標劔伎神

J R 山田上口駅より徒歩4分

止由気大神宮儀式帳所載造宮使造宮三社中の一で、延喜大神宮式及び神名式に載っている。祭神は神名祕書に草薙劔、類聚神祇本源所引の社記には標劔伎とある。（ミシルシノツルギ）

垂仁天皇の時代、度会氏の遠祖、大若子命が勅命を奉じ標劔を賜って、越国の兇族阿彦を平げ、大幡主命の名を賜った。

本社はその標劔の御霊を奉祀するところ、かの日本武尊が草薙劔の靈威により、東夷を平定されたことに擬して、後世社号を「草奈伎神社」とよんだのではなからうか。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎大間国生神社（豊受大神宮摂社） 祭神 大若子命 乙若子命

止由気大神宮儀式帳所載、造宮使造替三社の一つで、延喜大神宮式及び神名式にも載っている。

創立については、倭姫命世記雄略天皇22年の條に、「大若子命の社を定む、大間社是なり」とある。なお、神名祕書及び神祇本源所引の社記には、本社の祭神を大若子命と弟（乙）若子命の二柱としてある。

大若子命は天日別命の後裔で、一名大幡主命という。この地を支配してきたが、天照大神を迎え奉ってこの地に宮柱太しきを立て、所領献納を申し出た。大同本紀には、皇大神鎮座のとき、大幡主命、物部八十友の諸人等を率いて荒御魂宮地の荒い草木根刈掃い、大石を取り平らげて大宮を定め奉ったという。

後、功をもって大神主職、神国造を兼ね、子孫はその職を世襲し天武天皇のとき改めて豊受大神宮祢宜に補せられ、明治維新に及ぶ。いわゆる度会氏はこれである。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門板扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

◎清野井庭神社（豊受大神宮摂社） 祭神屋船神（草野姫命）

延喜大神宮式及び神名式に記載あり。祭神は御鎮座本縁に屋船神、神名祕書に草神、神祇本源所引の社記に草野姫命とある。清野というのは、止田原の一つの原野で、そこの灌漑用水の井堰の神を祭ったのが本社の起こりである。

屋船神は、屋船久々能遅命とか、屋船豊宇気姫命とか見えており、豊受大神の宮殿、家屋に幸い給う神霊を称する名。草野姫はその分霊という説

あり 中世以後社地不明、寛文三年、摂社再興のとき、大間国生神社の東方に再興。現在、ここに祭られているが、宮町にある「今社」は「イバ社」の転化で本社の旧地といわれている。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門板扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

(神宮摂末社巡拝、伊勢市の文化財、ドラマチックロケーション三重、度会町総合計画ほか)